◆ 中央図書館の催し物 ◆

中央図書館では、企画展を開催しています。ぜひ期間中に図書館に足をお運びください。

▶場　　所：台東区立中央図書館（台東区西浅草3－25－16）　2階　郷土・資料調査室内　ゆかりの文学コーナー
▶開館時間：月～土曜日　午前9時～午後8時　日曜日・祝日　午前9時～午後5時
▶休 館 日：毎月第3木曜日
お問合せ先：中央図書館郷土担当　☎5246－5911

郷土・資料調査室　企画展　「日記が語る台東区5　『藤岡屋日記』の世界」

「日記が語る台東区」シリーズその５として『藤岡屋日記』をとりあげます。

『藤岡屋日記』は、神田御成道の本屋、須藤由蔵（藤岡屋由蔵）による広範な情報を集めた史料です。日記といっても現代の日記とは違い、噂話やビラなどさまざまなメディアから引用してきたその内容は、幕末の江戸の世相を詳細に映し出しています。

本企画展では、日記から台東区の地域情報に注目し、特に安政2年（1855年）に起きた安政大地震など、幕末期における大小さまざまな事件を紹介します。

▶期　　間：6月22日（金曜日）～ 9月16日（日曜日）

●企画展に関連して、専門員によるイベントも開催いたします。

●専門員によるギャラリー・トーク
▶内　　容：展示品の見どころを直接展示会場で解説。
▶日　　時：8月12日（日曜日）午後4時15分～5時
▶会　　場：台東区立中央図書館　2階郷土・資料調査室
▶定　　員：先着20名
▶申　　込：事前に直接来館の上申込み。または、電話での申込み。
▶参 加 費：無料

●専門員によるスライド・トーク
▶内　　容：展示品の見どころをスライドで解説。
▶日　　時：9月13日（木曜日）午後6時～7時
▶会　　場：台東区生涯学習センター　504教育研修室
▶定　　員：先着50名
▶申　　込：不要
▶参 加 費：無料

郷土・資料調査室　企画展
「台東区の縁日 ―朝顔市・酉の市・歳の市―」

台東区には朝顔市、植木市、ほおずき市、酉の市、歳の市など、今に伝わる縁日がたくさんあります。本企画展では、浮世絵や和本、髙相コレクションから、季節感あふれる年中行事を紹介します。

▶期　　間：9月21日（金曜日）～ 12月16日（日曜日）

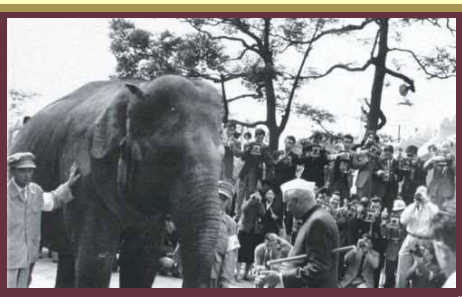
●企画展に関連して、イベントも開催いたします。

●トーク・イベント「台東区の縁日」
▶タイトル：「植木を商う縁日の歴史」
　　「ブックトーク・テーマ 縁日」
▶日　　時：11月25日（日曜日）午後2時～4時
　　12月18日（火曜日）午後2時～4時
▶会　　場：台東区生涯学習センター
　　504教育研修室
▶定　　員：先着50名
▶申　　込：不要
▶参 加 費：無料

●専門員によるギャラリー・トーク
▶内　　容：展示品の見どころを
　　直接展示会場で解説。
▶日　　時：10月7日（日曜日）
　　午後4時15分～4時45分
▶会　　場：台東区立中央図書館
　　2階郷土・資料調査室
▶定　　員：先着20名
▶申　　込：事前に直接来館の上申込み。
　　または、電話での申込み。
▶参 加 費：無料

懐かしの写真（連載）

ネールインド首相 上野動物園　昭和32.10.8



昭和24年5月、台東区の子供議会は、名古屋市東山動物園からゾウを一頭借りようと決議しましたが実現しませんでした。しかし、ゾウを見たいという子供たちの願いはネール首相に届き、自分の娘の名前である「インディラ」と命名し、日本へ贈りました。写真は、ネール首相が上野動物園に来園し、贈ったゾウと再会した様子です。　撮影　髙相嘉男氏

※今回の写真は、中央図書館で閲覧できるほか中央図書館ホームページでも公開しています。ぜひご覧ください。

連載　子供に聞かせたい、こんな話　その25

こころざし高く

いつか東京にオリンピックを

―嘉納治五郎―

嘉納治五郎は、一八六〇年（万延元年）、神戸に生まれました。江戸から明治へと、世の中が大きく変わろうとする時代のことです。

治五郎は、いつも母から「他の人のためにつくすことを忘れてはいけませんよ。」との教えを受けて育ちました。

十七歳になった治五郎は、東京帝国大学（現在の東京大学）に入り、政治、経済、教育などを学ぶとともに、念願だった柔術の道場へ入門します。「相手を攻撃するために強くなるのではなく、相手とともに技も心も高め合っていく柔術の道として、多くの人たちに広めていけないだろうか。」治五郎はこの頃から、柔術を、「人道の精神」とも一致する、「柔道」と名付けました。

治五郎は教育者の道に進むとともに、台東区下谷稲荷町の永昌寺に住まいと道場を構え、「講道館」と名付けました。門弟を集め「精力善用」と「自他共栄」の考えを説き、稽古を積みました。

治五郎には、さらに大きなことを成しとげる運命が待っていました。日本のオリンピック参加に大きく関係することになるのです。なぜ治五郎の目は、世界へと向けられていったのでしょうか。

そのころ世界では、スポーツを通じて国々が交流する「オリンピック」という国際大会が始まっていました。その創始者がイギリス人のクーベルタンです。「オリンピックの理想は、互いの理解を深め、人間を育てること。大切なのは勝つことではなく参加すること。」クーベルタンはそう説いていました。そのクーベルタンから、「柔道の嘉納」として世界中に知れわたっていた治五郎へ、国際オリンピック委員になってほしいとのさそいがありました。

「西洋と東洋とが手を取り合い世界平和のためにつくしましょう」「外国の人と接すると、日本の人々も変わる。スポーツは、青少年の心と体を通じ合わせる大きな力となる。」治五郎は長年となえてきた自他共栄の精神と、一致するクーベルタンの考えに共鳴します。

一九一二年（大正元年）五月、スウェーデンで行われた第五回ストックホルムオリンピックに、日本は初めて選手団を送りました。そこには、ほこらしげに入場行進をする、選手団長の治五郎の姿がありました。オリンピック参加を何回も重ねるうちに、治五郎の中で、ある思いがふくらみます。「一九四〇年（昭和十五年）の大会を、何としても東京に招致しよう。」

治五郎は三年間で十五カ国を回り、アジア初のオリンピック開さいを訴えました。しかし、欧米諸国には、アジアの小さな国、日本での開さいに疑問をもち、根強い反対がありました。

次の開さい地を決める国際オリンピック委員会の総会で、治五郎は英語で堂々と歴史的なスピーチをします。

「アジアは、国力が小さい国が多く、ヨーロッパに選手を送り込むことさえ困難です。しかし、日本で開さいすれば、アジアの国々は参加しやすくなります。また、欧米の巨大な国力をもってすれば、アジアで行っても参加できるはずです。オリンピックは欧米だけのものではありません。真の世界の文化を目指すのであれば、日本で開さいすべきであります。」

六回にわたり繰り返し会議を重ねた末、この演説が決め手となり、ついに一九四〇年（昭和十五年）の大会招致に成功します。

治五郎はこう語ったと言います。

「クーベルタンがかかげた理想通り、オリンピックが真の世界的なものとなる。同時に日本の真の姿を世界に知らせることができるので、二重の意味で愉快である。」

しかし当時、日本は戦争に突き進んでいました。東京オリンピックをひかえた一九三八年（昭和十三年）、治五郎は北米での打合せを終え帰国の途につきましたが、太平洋上で体調を崩し、この世を去りました。

日本はその二ヶ月後に戦争を理由に開さいを返上しました。東京オリンピックは幻の大会となってしまいました。

戦後、治五郎の意志をつぎ、日本は再び、「復興と平和のシンボル」として、日本でのオリンピック開さいに名乗りを上げたのです。

一九六四年（昭和三十九年）一〇月一〇日、東京。世界中の若者たちが集まる競技場の上に、青空が広がりました。

戦争によって中止に追い込まれた東京オリンピックの開さいが決定し、ついにアジア初のオリンピックが行われるのです。アジアの国々も、こぞって東京大会に参加し、治五郎の願いがかないました。

治五郎がなくなってから、二十五年がたっていました。

［出典］嘉納治五郎「嘉納治五郎　私の生涯と柔道」
日本図書センター　平成八年
高野正巳「近代日本五輪の父　嘉納治五郎」
講談社　火の鳥伝記文庫　平成八年
※出典を参考文献として文章を構成しています。
小学校４～６年生用こころざし教育副読本に掲載

お問合せ先：教育支援館
☎5246－5921